



# ブリ①

ブリは我が国周辺と朝鮮半島東岸に分布し、全国の都道府県沿岸および韓国にて漁獲されている。

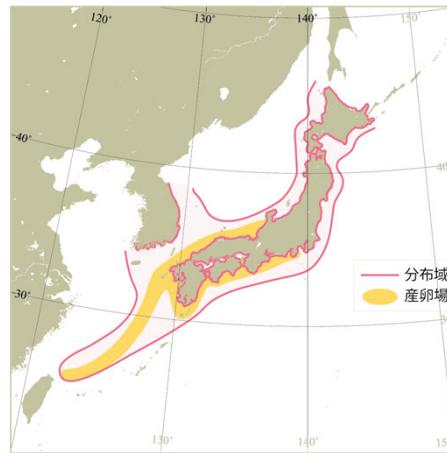


図1 分布域

東シナ海から北海道までの我が国周辺域と朝鮮半島東岸に分布する。産卵は、東シナ海の陸棚縁辺部から、太平洋側では伊豆諸島以西、日本海側では能登半島以西で行われる。

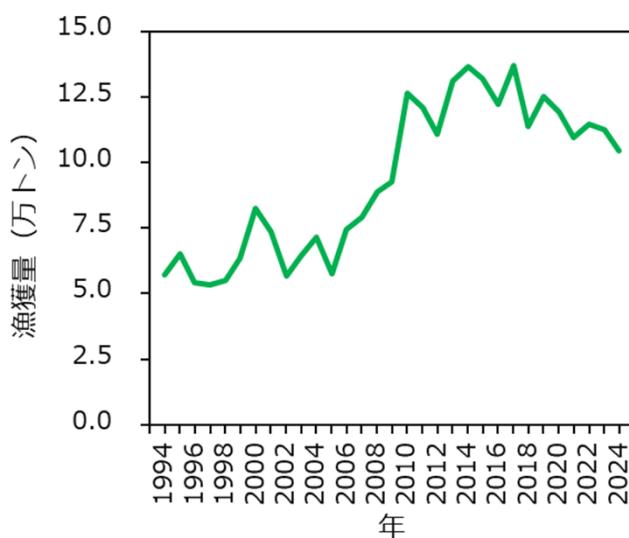


図2 漁獲量の推移

漁獲量は2010年に急増し、2014年の13.6万トン（日本12.5万トン）を最高に、近年は11万トン前後で推移している。2024年の漁獲量は10.4万トン（日本8.1万トン、韓国2.3万トン）であった。

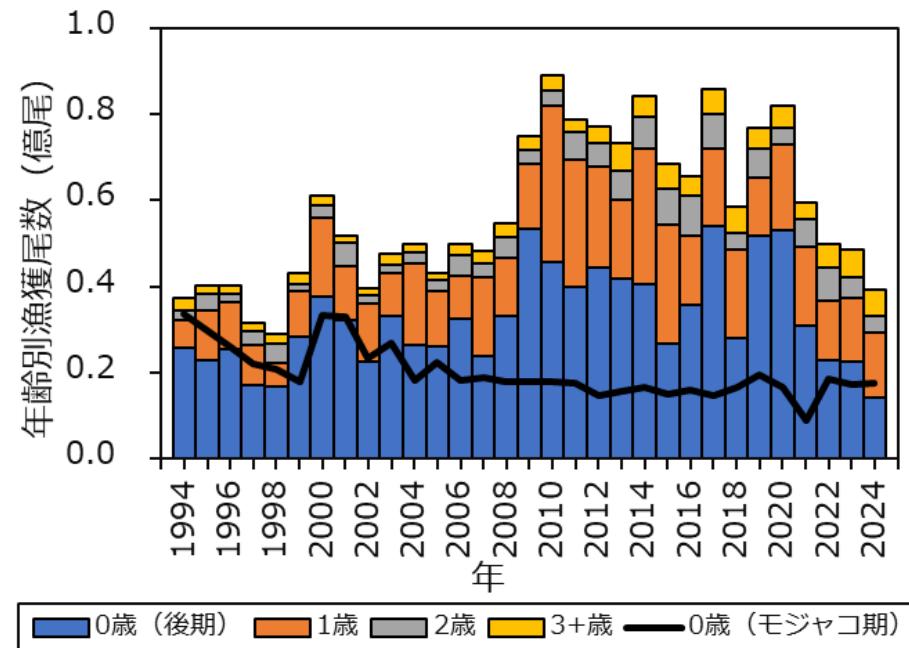


図3 年齢別漁獲尾数の推移

0歳魚（モジャコ期）を除く漁獲尾数は1994～2008年は0.3億～0.6億尾、2009～2020年は0.6億～0.9億尾、2021年以降は0.4億～0.6億尾で推移し、2024年は0.4億尾であった。漁獲尾数の年齢構成は、0歳（後期）魚および1歳魚の漁獲が全漁獲尾数の7～9割を占めている。0歳魚（モジャコ期）は、2024年は0.2億尾であった。

# ブリ②

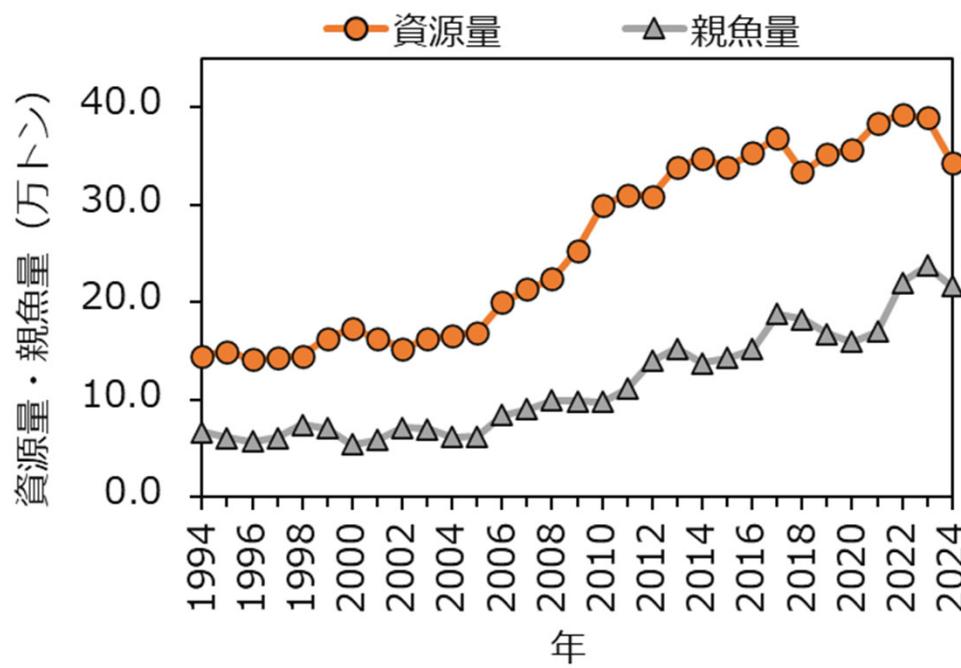


図4 資源量と親魚量の推移

資源量は2008年まで横ばいで推移し、2009年以降は増加傾向で、2022年には最高の39.2万トンとなった。2024年の資源量は減少し、34.3万トンとなった。

親魚量は1994年以降増加傾向で、2023年は最高の23.8万トンとなった。2024年の親魚量は21.6万トンであった。

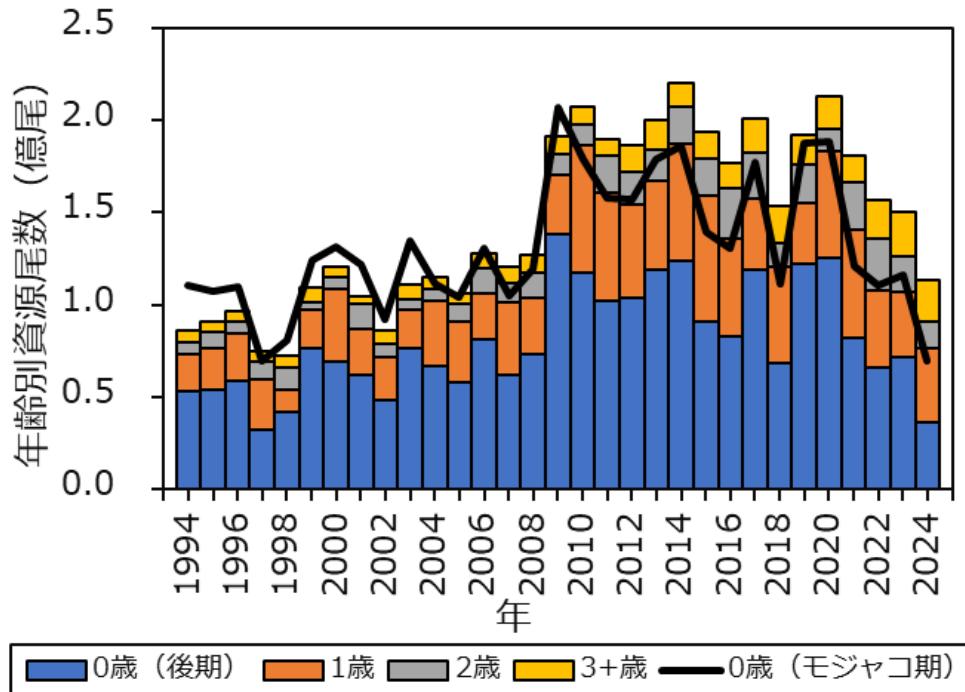


図5 年齢別資源尾数の推移

資源尾数（0歳魚（後期）以降の資源尾数）は2008年までは横ばいで推移し、2009年以降、大きく増加した。その後、高水準を維持したが、2021年以降減少傾向に転じ、2024年は1.1億尾となった。

加入量（0歳魚（モジヤコ期）の資源尾数）は、2021年以降は減少傾向で2024年は1994年以降最低の0.7億尾であった。

# ブリ③

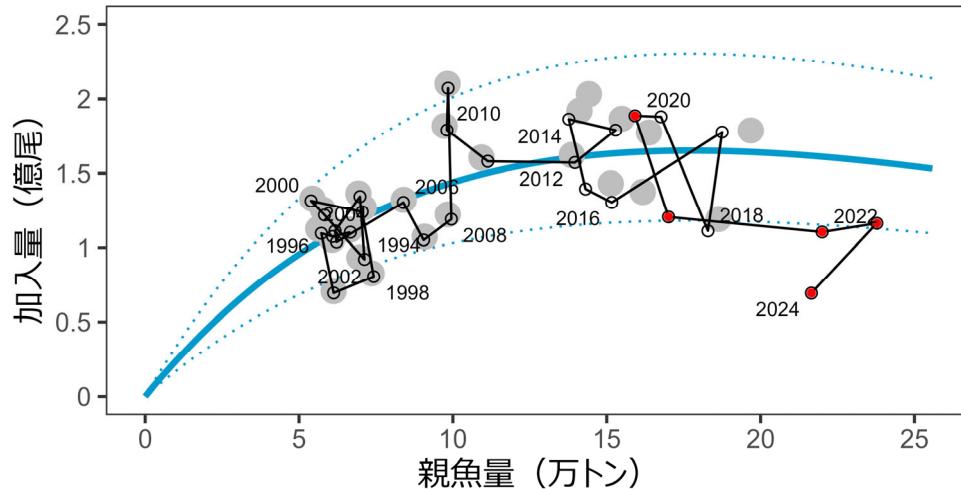


図6 再生産関係

1994～2020年の親魚量と加入量に対し、リッカータイプの再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲である。

灰丸は再生産関係を推定した時の観測値、白丸は2025年度資源評価で更新された観測値、赤丸は近年5年の観測値である。

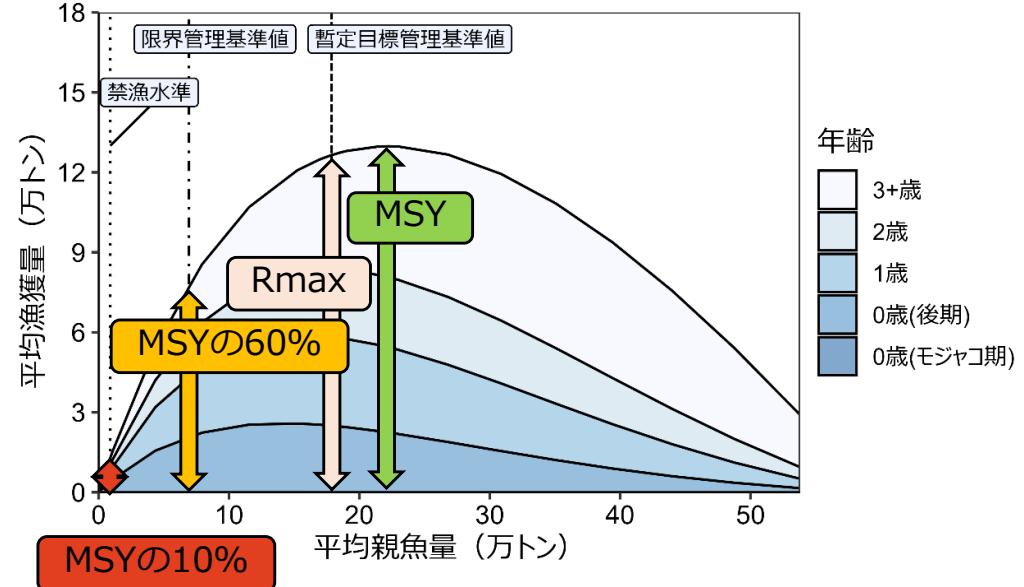


図7 管理基準値と禁漁水準

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SB<sub>msy</sub>）は22.2万トンと算定される。暫定目標管理基準値は加入量が最大となることが期待される親魚量（SBR<sub>max</sub>）、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

SB <sub>msy</sub>	暫定目標管理基準値 (SBR <sub>max</sub> )	限界管理基準値	禁漁水準	2024年の親魚量	MSY	R <sub>max</sub>	2024年の漁獲量
22.2万トン	17.9万トン	6.9万トン	0.9万トン	21.7万トン	13.0万トン	12.6万トン	10.4万トン

# ブリ④

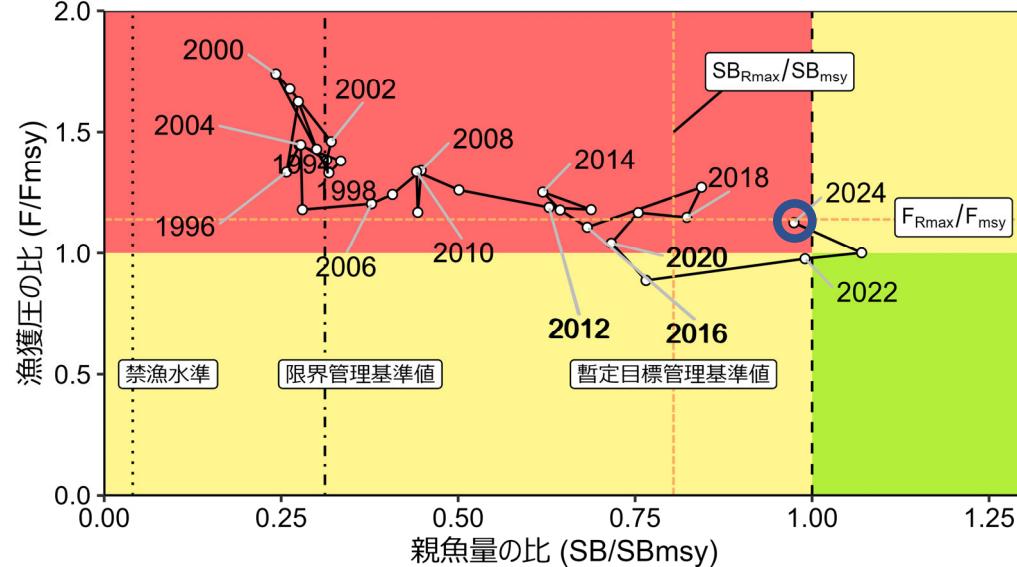


図8 神戸プロット（神戸チャート）

親魚量（SB）は、1994～2023年の期間は暫定目標管理基準値である加入量が最大となることが期待される親魚量（SB<sub>Rmax</sub>）の0.30～1.33倍の範囲で推移し、2024年は1.21倍で、SB<sub>Rmax</sub>を上回った。漁獲圧（F）は、1994～2023年の期間はFR<sub>max</sub>の0.78～1.53倍の範囲で推移し、2024年は0.99倍で、FR<sub>max</sub>を下回った。

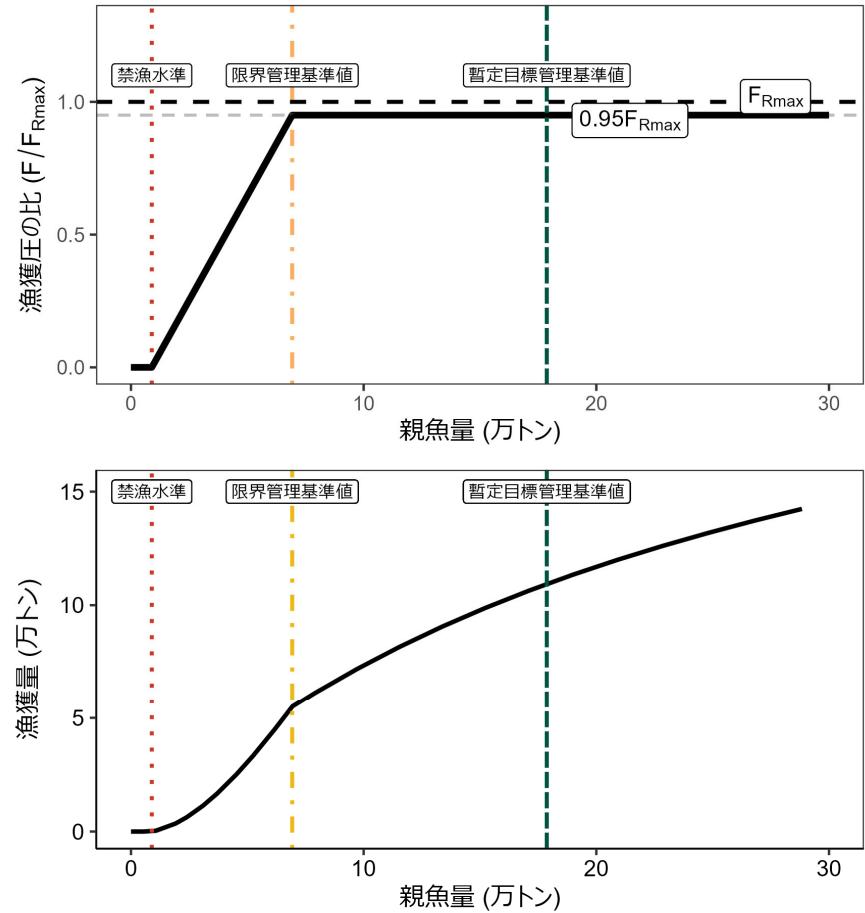
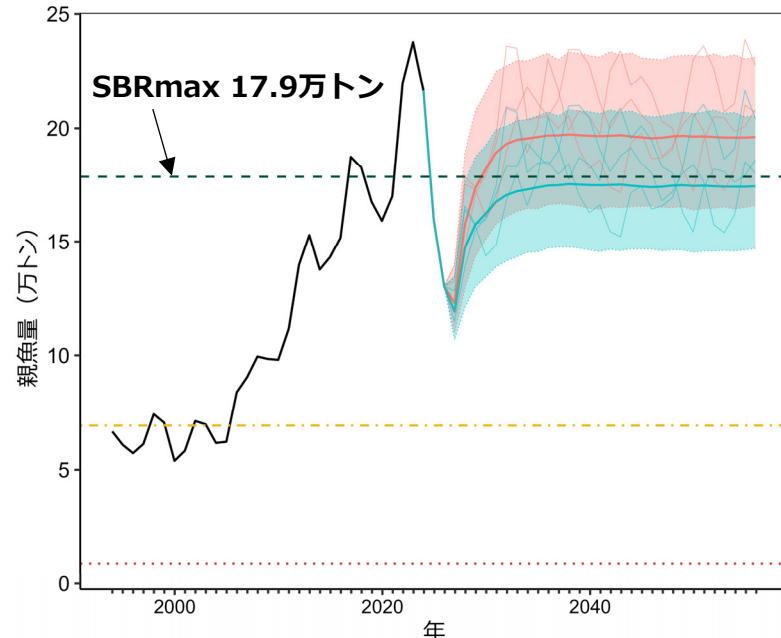


図9 漁獲管理規則  
(上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量)

FR<sub>max</sub>に乘じる調整係数であるβを0.95とした場合の漁獲管理規則を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

# ブリ⑤

## 将来の親魚量 (万トン)



## 将来の漁獲量 (万トン)

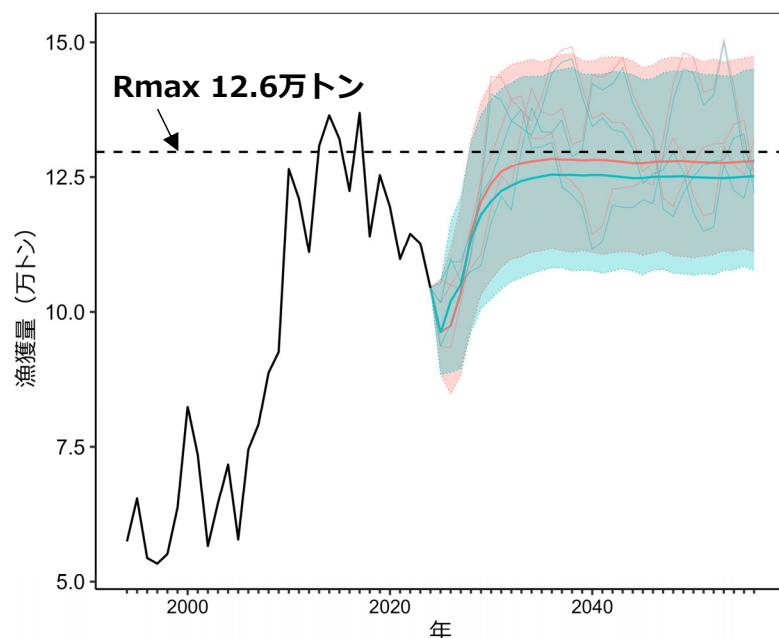


図10 漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

$\beta$ を0.95とする漁獲管理規則に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。

親魚量の平均値は暫定目標管理基準値を上回る水準で推移し、漁獲量の平均値はRmaxを少し下回る水準で推移する。

漁獲シナリオに基づく将来予測  
( $\beta = 0.95$ )

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（2千回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

----- Rmax

— · — · — 暫定目標管理基準値(SBRmax)

— · — · — 限界管理基準値

····· 禁漁水準

# ブリ⑥

表1. 将來の平均親魚量（万トン）

$\beta$	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2035年に親魚量がSB <sub>msy</sub> （22.2万トン）を上回る確率		
												2035年に親魚量が暫定目標管理基準値（17.9万トン）を上回る確率		
1.00				12.0	14.9	16.0	16.6	17.1	17.5	17.6	17.7	17.8	46%	2%
0.95				12.3	15.8	17.4	18.2	18.9	19.3	19.5	19.6	19.6	81%	9%
0.90			12.6	16.6	18.8	20.0	20.9	21.3	21.4	21.4	21.4	21.4	96%	33%
0.85			12.9	17.6	20.4	21.9	23.0	23.3	23.4	23.3	23.3	23.3	100%	66%
0.80			13.3	18.6	22.1	24.0	25.2	25.5	25.3	25.1	25.0	25.0	100%	88%
現状の漁獲圧			11.9	14.7	15.7	16.2	16.8	17.1	17.2	17.3	17.4	17.4	38%	1%

表2. 将來の平均漁獲量（万トン）

$\beta$	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	
1.00			10.1	10.5	11.4	11.9	12.1	12.3	12.4	12.5	12.6	12.6
0.95			9.7	10.3	11.4	12.0	12.4	12.6	12.7	12.8	12.8	12.8
0.90			9.4	10.2	11.4	12.2	12.6	12.8	12.9	12.9	12.9	12.9
0.85			9.0	10.0	11.4	12.3	12.7	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9
0.80			8.6	9.8	11.4	12.3	12.8	12.9	12.9	12.8	12.8	12.8
現状の漁獲圧			10.2	10.5	11.3	11.8	12.1	12.2	12.3	12.4	12.5	12.5

漁獲シナリオに基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。漁獲シナリオでは、 $\beta=0.95$ を用いた漁獲管理規則で漁獲を行う（赤枠）。2025年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧（2024年は $\beta=1.01$ に相当）により仮定した。

この漁獲シナリオに従うと2026年の平均漁獲量は9.7万トン、2035年に親魚量が暫定目標管理基準値を上回る確率は81%と予測される。併せて、 $\beta$ を0.8~1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧を続けた場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表

2026年のABC (万トン)	2026年の親魚量 予測平均値 (万トン)	現状の漁獲圧に対する比 (F/F2024)	2026年の漁獲割合 (%)
9.7	13.0	0.94	34

※表の値は今後の資源評価により更新される。